

AUI構想の具体化に向けて アジアの未来社会をデザインする人材育成とは

公益財団法人トヨタ財団
シニア・プログラム・オフィサー
田中恭一

●この報告の目的は？

- アジアの未来社会をデザインできる人材を育成する上で重要と思われるポイントを示す
- アジア協働大学院のカリキュラム作成へのインプット(基礎・参考資料)
- 問題提起
⇒キック・オフとしての位置づけ。広く意見をいただく機会

アジア協働大学院について

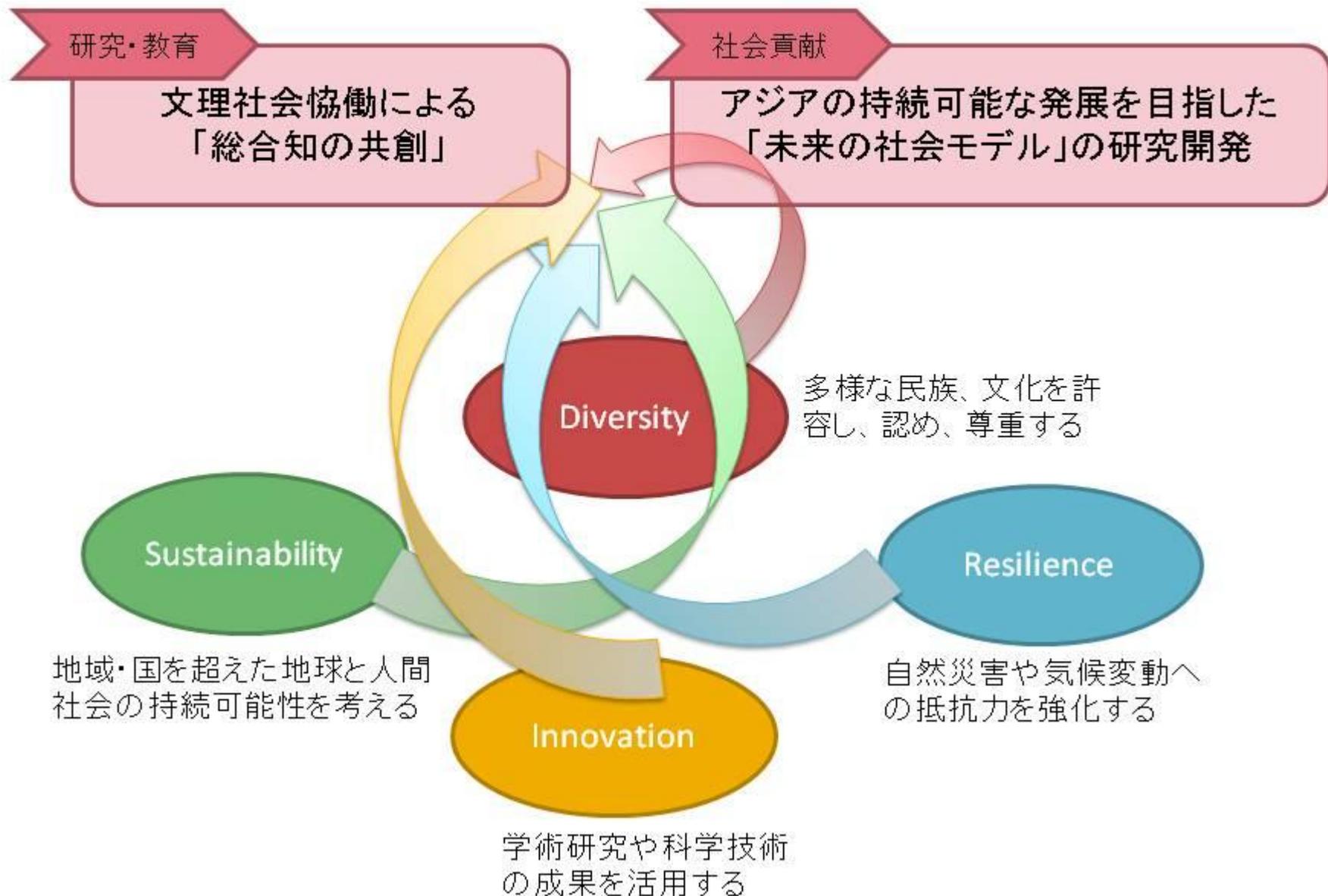
●計画の前提 (その1)

- 国民国家の枠を超えた国際的な地域大学院 (Regional University Institute)の創設
- 未来の社会モデルの研究開発や地域協力を担う専門的人材の育成
- 地域の多様性を踏まえた教育研究活動や社会貢献の実践をつうじて、21世紀のアジア地域の知的プラットフォームとして、20世紀のアメリカ型大学モデルを乗り越えたアジア型大学モデル

●計画の前提 (その2)

- アジアにおける留学経験を踏まえ、アジア地域の多様性(Diversity)へ敏感な感性を備え、大学院レベル(修士・博士)の文理社会協働(トランスディシプリン:文系知と理系知の専門家と市民社会との協働)による「総合知」を修得した高度専門職業人(Professional Regional Designer)として育成する。

アジア協働大学院(AUI)のコンセプト



●アジア協働大学院の目的とは?

(端的には)

地域(アジア)益を第一義的とする姿勢を持ちつつアジア地域協力の未来を担う「社会モデル」をデザインできる専門的人材を育成する。

(参考)

清華大学日本研究センター「孫文塾」

●孫文塾?

約100年前、孫文が指導する辛亥革命は、志を同じくする数多くの日本の友人たちの理解と協力を得ながら、様々な困難を乗り越え、アジア最初の共和制国家樹立という夢を実現した。

この歴史的遺産を継承し、21世紀における日中両国の相互理解を深め、健全なる相互依存関係を推進する日中両国におけるビジネスリーダー育成を願う。

●概要

- 清華大学日本研究センターは、設立以来、日本研究、日中交流および人材育成などの面で活動してきた。
- センターの人材育成事業の一環として、21世紀における日中関係の構築に貢献できる人材を育成するため、日中ビジネス界の次代を担う中堅幹部を対象に、古典から最新の中国事情に関する知識を体系的に修得する。

● 発起人

- 飯田亮(セコム株式会社最高顧問)
- 江頭敏明(三井住友海上火災保険株式会社代表取締役会長)
- 大橋洋治(全日本空輸株式会社取締役会長)
- 岡田卓也(イオン株式会社名誉会長相談役)
- 顧稟林(前清華大学学長・清華大学日本研究センター顧問)
- 藤沼彰久(株式会社の村総合研究所代表取締役会長)
- 福川伸次(元通産事務次官)
- 御手洗富士夫(キャノン株式会社代表取締役会長)
- 曲徳林(清華大学日本研究センター主任)
- 李廷江(清華大学日本研究センター常務副主任) 幹事

50音順 2012年2月現在

専門的人材のイメージ?

●どんな人?

▪どんな分野で活躍する人?

国際公務員、民間企業、マスコミ、
各国の政府機関、学者、研究者、NGO、
NPO etc...

∴様々な分野で活躍する人?

▪「総合知」を体現できる人」ではないか?

●「総合知」とは?

- 松岡俊二理事長による造語。

(定義)

⇒ 文系知と理系知の専門家と市民社会との協働から生まれる知識のこと。

Integrated and Synthesized Knowledge

仮説の提示

● 仮説

- 社会をデザインしていく上では、ステークホルダー間での多様性を認め合うことが重要である。その関係性は「合意形成」につながり、結果的に持続性、弾力性をもつ社会を形成することとなる。そのことが様々な社会的課題を解決することを可能にしていく。

●考え方

(目的)

地域(アジア)益を第一義的とする姿勢を持ちつつアジア地域協力の未来を担う「社会モデル」をデザインできる専門的人材を育成する。



「多様性を認め合う」態度をもてる人は、地域(アジア)益を優先しつつ社会をデザインできるのではないか。

仮説を導き出したプロセス(帰納法)

● 経験から

- 職業としての「異文化コミュニケーション」
- 具体的事例、経験から導き出した仮説
- 多くの事例の中でも特に印象的な以下2団体

(事例)

『90歳ヒアリング』

『アトリエ・インカーブ』

(参考)
演繹的な考え方として

●「真善美」を備えている人?

真善美とは

『広辞苑』

⇒認識上の真と、倫理上の善と、審美上の美と。
普遍妥当な価値を言う。

『大辞林』

⇒人間の理想である、真と善と美。それぞれ、学問・道徳・芸術の追求目標といえる、三つの大きな価値概念。

●真

- 学問
 - ここでは、「総合知」の修得
 - 「総合知」の定義
 - ⇒ 文系知と理系知の専門家と市民社会との協働から生まれる知識のこと。
- Integrated and Synthesized Knowledge

●善

- 道徳
- ここでは、地域(アジア)の公共益を国益より優先する心、能力、判断
- 必ず行動に結びつくという保証はない、という点については留意が必要か。

●美

- 芸術、文化
- ここでは、相手の感性に働きかけ共感を得られるような「何か」
- テクニック(技能)でカバーできる部分もありそうな気がする

●「善」が鍵を握る?

- 座学では得られないものに焦点
⇒「総合知」(真における)、テクニック(美における)は、ある程度「座学」でも修得可能。
- 善は、経験から培われるのではないか。
- 地域(アジア)益、公共心を育む。
⇒「多様性を認め合う態度」が鍵を握る?

●補足

- 「総合知」に関する調査・研究
⇒カリキュラムに盛り込む科目等を確定する際に必要となる。
- 共感を得るアプローチに関する調査・研究
⇒効果的なテクニックがあるように思われる。

「多様性を認め合う態度」とは

●前提として

- 先入観を持たずに相手のことを見る。理解する態度のことではないか。
- 「観点変更」?
⇒アトリエインカーブ代表の今中博之氏の
考え方

90歳ヒアリング

●概要

- 90歳前後の方々が持つ低環境負荷の暮らしの知恵や技術を一つでも多く学び取り、昔の暮らしの知恵や自然と共生するライフスタイルからヒントを得て、それらを応用することで、新しいものづくりや社会システムの形成に活かし、子孫のための将来のまちづくりの提案をしていくことを目的とする。

●特徴

- ヒアリングを通じて、時空を超えて一緒に体験するかのような不思議な気分になり、貴重な追体験の機会を得る。
- その感覚は「共感」、あるいは「記憶」との「共鳴」。全く暮らしぶりの異なる時代に生活しながら、心豊かに暮らすヒントが隠されている。
- ヒアリングからの膨大な結果から、複雑に絡んだ事象をひも解きながら、時空を越えた「共振」部分を探し求めていく。

●「観点変更」という視点

- 高齢者は口数も少なく、われわれがケアする対象として接するのが普通である。
- ところが、このプロジェクトでは、そうした先入観を捨てて、「知識、過去の経験を豊富に有した先人」として接している。
- その結果として、非常に自然な形で、現代社会に裨益できるような多くの知見を獲得することが可能となっている。

日本人が
大切にしたい
暮らしの知恵を
シェアしよう

90歳ヒアリングのすすめ

古川柳蔵
佐藤 哲

温故知新、
昔話を現代に焼き直す

行政、マスコミ、産業界、大注目のフィールドワーク

いま90歳の人は、戦前に成人し、エネルギー消費量が現在の半分だった
1960年に40歳になり、一家の大黒柱として生計を立てていた。
その頃に蓄積するさまざまな知恵は、自然と共生するために合理的なものばかり。
「ちよどよい暮らし」のヒントがここにあります。

日経BP社
定価 1,980円(税別)

アトリエ・インカーブ

●概要

- 福祉施設（指定生活介護事業所）。社会福祉法人素王会による通所型の施設で、在籍する知的障害者をアーティストと位置づけ、彼らの創作活動の環境を整え、独立することを支援している。1998年から無認可作業所として運営されていた「アトリエ万代倉庫」が、2002年に社会福祉法人を設立、2003年にアトリエインカーブが開設された。2006年、出版事業を「ビブリオインカーブ」としてはじめている。

●特徴

- 11名の運営スタッフは、美術およびデザインの教育を受けている。そして、彼らのいずれも、知的障害をもった作家の作品に感銘を受け活動に参加するようになった。
- ミッションとして「障害者の創造活動について既存の福祉的あるいは芸術的な評価軸によらず作品のオリジナリティに対する評価を得て、その結果として作家本人の経済的自立を支援する」とある。

●「観点変更」という視点

- 今中博之氏曰く
- 「ヒトもモノもコトも、見る角度によって美しくも、醜くも、優しくも、冷たくもなることを知った。これまでの私の見る角度は、既成概念という鎖で固定されていた。鎖が体から溶け出してからは、ヒトもモノもコトも見る角度や高さを少しずつコントロールできるようになってきた」

観 点 変 更

THINK ANEW

なぜ、アトリエ・インカーブは生まれたか
The Reason Why atelier incurve Was Born

今 Hiroshi Imanaka

中
博
之

主筆

山口智子→初めて心が

第83回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館コミッションナー

南 島 宏→これはアー

今後の作業

●事例収集と分析

- ・先の仮説について、できるだけ多くの事例を当てはめて検証する。
- ⇒特に、「多様性を認め合う態度」が、求めているような「社会デザイン」に結びつく、要因、道筋について、より詳細な説明が可能となるように整理していく。

●事例収集と分析

(事例対象)

「東日本大震災での支援活動」(地域益)

「国際的な課題解決を目的とした協力活動」

(地球益)

「社会企業家による事業」(社会益)



「観点変更」の現場

カリキュラムへの反映

●「多様性を認め合う」ことの体感

学生が多様性を意識せざるを得ない環境を創り出す。そうした仕掛けづくり。



座学ではなく「1年間のフィールド実践」を実施し、そこでの知見を持ち寄り、他の学生と議論するという協働作業を経験する。

●3年間のコース?

(1年度目)

座学 「総合知」、「社会デザイン」スキル 他

(2年度目)

フィールド実践

(3年度目)

総合演習

参考文献(紹介事例に関する)

- 今中博之 (2009) 『観点変更』 創元社
- 比留間雅人 (2013) 「ミッションとマーケティング」、『新しい公共・非営利のマーケティング』水越康介・前田健編著、pp266-298、碩学叢書
- 古川柳蔵・佐藤哲共著 (2012)
『90歳ヒアリングのすすめ』 日経BP社
- 李廷江 (2003) 『日本財界と近代中国』
御茶ノ水書房